

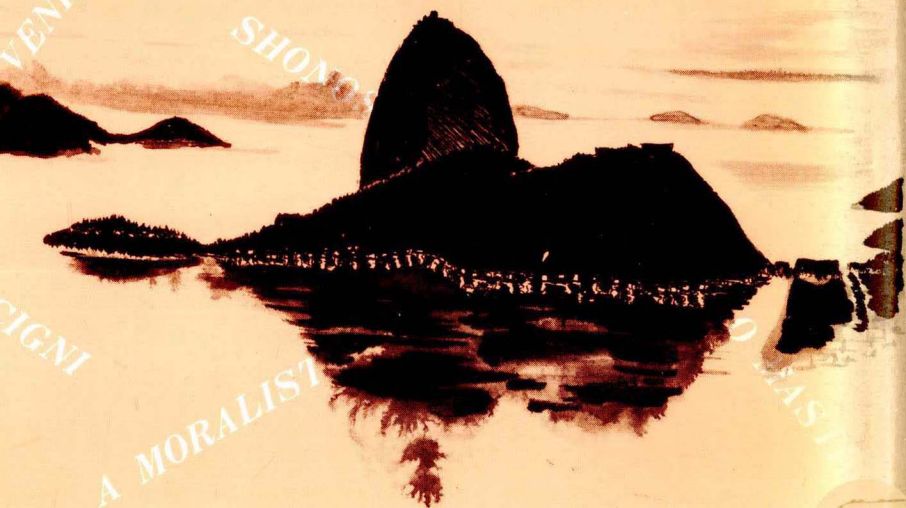
ブラジル文学短篇集

ディナー・S・ケイロス
レナール・ペレス

編

LATIN AMERICAN NOVEL

広川和子 訳



新世界社

O MORRINHO

ブラジル文学短篇集

ディナー・S・ケイロス 編
レナール・ペレス
広 川 和 子 訳



LATIN AMERICAN NOVEL

新世界社

LATIN AMERICAN NOVEL

ブラジル文学短篇集

ディナー・S・ケイロス
レナール・ペレス 編



訳者紹介

広川和子

東京に生まれる

1960年 日本女子大学卒

1976年 リオ・デ・ジャネ

イロ・カトリック大学留学

現在新世界研究所勤務

昭和52年10月31日 印刷

昭和52年11月5日 初版発行

訳者 広川和子

印刷所 三美印刷株式会社

発行所 新世界社

販売所 新世界研究所

東京都千代田区九段北1-9-12
谷内ビル

TEL. 代表 03 (262) 5869

乱丁・落丁は発行所でお取替えいたします。

出版にあたって

今日、私たちは欧米の、あるいはソ連、中国の文学の殆どあらゆる作品を日本語で読むことが出来ます。そして夥しい量のそうした翻訳小説は、日本の文学ならびに文化にも絶えず影響を与えております。しかしながら、ラテン・アメリカの文学が日本に紹介される機会は今迄ありませんでした。それは、良いものがないから——というような誤解に発展し勝ちな印象を与えておりますが、実はそうではなくて、スペイン語圏、ポルトガル語圏からのコミュニケーションがなかったためであります。

しかし、今年の五月に、ブラジルの代表的な流作家でこの短篇集の編者でもある、デイナー・シルヴェイラ・デ・ケイロス女史が、名作「母なる奥地」出版記念に来日されたことが、日本のマスコミの大きな反響を呼び、これを契機として日本とブラジルの出版を通じての文化交流が活発になって来しました。ブラジルには、欧州、とくにフランスの影響を受けた香り高い都会文学に加えて、土着原住民の素朴さの漂う地方文学があり、ここに収められた二十八の短篇は、それぞれ、代表的作家の持味をよく表わしています。すぐれたものは万人に共通する、と言われておりますが、読者の皆様もこの本を読んで楽しまれた後でそう思われるのではないでしょう。

一九七七年十月

酒井 美意子

目次

出版にあたって

クリスマス・イヴのミサ（マシャード・デ・アシス）	一
つけ鼻の美人（ジョアウン・ド・リオ）	二
サンバのシンフォニー（アニバル・マシャド）	七
雨の夜（リバイロ・コウト）	二九
電話魔（カルロス・ドルモン・デ・アンドラーデ）	三七
ジプシー（オット・ララ・レゼンデ）	四〇
ジャワ語を喋る男（リマ・バレット）	四七
金星の男（ファウスト・クーニャ）	五七
チェッカー（サムエル・ラヴエ）	七二
シヨウノスケ（オリジェネス・レッサ）	七七
めんどり（クラリッセ・リスペクトール）	八五
夕焼けをもらん（リジア・ファグンデス・テレス）	八九
この大人たち！（エレナ・シルヴェイラ）	九九
始めての散髪（マリオ・デ・アンドラーデ）	一〇五
見習い泥棒（グラシリアーノ・ラモス）	一一五

兎のサーカス（マルケス・レベロ）	一二五
竹馬（アルメイダ・フィッシャー）	一三三
夜の欲望（ジョアン・アルフォンスス）	一三九
写真の声（ダルトン・トレヴィザン）	一四七
モラリスト（ディナー・シルヴェイラ・デ・ケイロス）	一五三
屠殺場の帰り（アントニオ・デ・アルカンタラ・マシャド）	一六一
ズルミラ先生の結婚	
（ライムンド・マガリアンス・ジュニオール）	一五五
小さな山（エルベルト・サーレス）	一七一
タンジェリン・ガール（ラケル・デ・ケイロス）	一七三
キンカス爺さんの復讐（ジョゼ・コンデ）	一七五
プープ・デッキ（レナール・ペレス）	一八九
なりんぼう（ヴァルドミロ・シルヴェイラ）	一九五
王（アドニアス・フィリオ）	二〇三
あとがき	二二一

クリスマス・イヴのミサ

マシャード・デ・アシス

一八三九年リオ・デ・ジャネイロ生まれ。貧しい家庭で育ち、十九世紀から二十世紀へかけてのブラジル最大の小説家である。リアリズム手法をとった彼の作品は、最高の文体の模範として今日なお愛読されている。ブラジル・アカデミーの創立者。一九〇八年リオ・デ・ジャネイロで歿。

もう大分昔のことになるが、ある婦人と交わした会話のことは、今でもよく分らない気がする。僕は十七才だったし、その婦人は三十才だった。クリスマス・イヴであった。ミサへは近所の友だちと行く約束がしてあったので、クリスマス・イヴには僕は寝ないことにしていた。そして夜中にかれを起こしに行くことと約束しておいた。

僕が下宿していた家はメネゼス書記のもので、かれは初婚のとき僕の従姉の一人と結婚した。そして二度目の妻のコンセイサウンとその母親は、僕が幾月か前に入学試験の準備のためマンガラチーバからリオ・デ・ジャネイロへや

って来たとき、快く迎えてくれたのであった。セナード街のある二階建ての家で、蔵書にちよっとつき合ったり、友だちは少ないが、散歩したりして、僕は静かな暮しを送っていた。この家族は少人数で、書記とその妻と姑と、女奴隷が二人だけであった。家庭のしきたりは古めかしく、夜は十時ともなれば皆寝室に引きとってしまい、十時半には、家中が寝入っていた。ともかく観劇などもしたことがないので、時々メネゼスが芝居に行くということを耳にすると、僕はお伴させて欲しいと頼んでみた。するとその時、姑は厭な顔をするし、女奴隷はしのび笑いをしていた。彼は何も答えず支度して出かけ、翌朝にならないと戻らなかった。あとで、劇というのはただのお上品な言い廻わりに過ぎないのを知った。メネゼスは、夫と別れたある女と週一回、外出していたのだった。そしてコンセイサウンは、愛人の存在を知ったときははじめ苦しんだが、終いにはあきらめ、慣れてしまい、どうってことはないと考えられるようになった。

お人好しのコンセイサウン！あの婦人は「聖女」と呼ばれ、その称号に値していた。あんなにも夫の気儘に耐えていたのだ。だが彼女はほんとうのところ落ち着いた性格で、極端にはしることもなく、あまり泣きもしなければ笑いもしないという感情の持主であった。

そしてこの件について言えば、まるで回教徒のようだった。もし体面が保たれればハレムも認めて良いというようなものであった。こんなことを云うと大変礼を欠くようだけれど、彼女の性格は非常におだやかで受け身であった。容貌そのものも美しくも醜くもなく平凡だった。つまり、感じのいいひとだったのだ。他人の悪口も云わず、あらゆることを許していた。大方、愛することも知らなかったのだろう……

あのクリスマス・イヴには、書記は「劇場」へ出掛けていた。一八六一年か六二年の頃のこと、僕は休暇でマンガラチーバへ帰る筈であったが、宮廷のクリスマス・イヴのミサに列するために、その夜まで残ることにしたのだった。家族の者たちはいつものようにベットに入り、僕は着換えして仕度したまま表に面した部屋に入っていた。そこからは誰も起こさないで玄関の通路に出ることができたのであった。玄関の鍵は三つあって、ひとつは書記が持ち、もうひとつは僕がもち、第三番目の鍵は家に残してあった。

「でもノゲイラさん、あなた、そんな長い時間、どうするおつもり？」

とコンセイサウンの母親が訊いた。

「僕、本を読みますよ、イナシア夫人。」

と答えた。たしかに僕は「三銃士」を手にしてはいたが、あれは多分「商業新聞」の古い翻訳だったと思う。僕は部屋の中にあつたテーブルに腰をかけ、紙燭の光で、家中が寝ているうちにダルタニヤンの黒い馬にうちのり、まともや冒険に出かけるのだった。まもなく、お気に入りのデューマに完全に酔っていた。ただ待っているときは異なつて時間は早く過ぎてしまい、時計の音が十一時を打つのが聞えた。それも偶然耳にしたので、時間には殆ど気がつかないくらいだった。だが、家の中からちょっとした音が聞えてきて、僕は読書から目ざめた。それは寝室から食堂への廊下を行く足音だった。頭をあげ、部屋の扉からコンセイサウンの姿をみた。

「まだ行かないの？」

彼女が尋ねた。

「行かないよ。まだ十二時になっていないようなもの。」

「随分忍耐づよいのねえ。」

と彼女が云った。

コンセイサウンは部屋の中へ入ってきたが寝室用のスリッパをはいていた。そして腰によくとめられていない白い寝衣をまとっていた。僕はつい今しがたまで読みふけていた冒険小説からまだ完全に醒めていなかったたので、あの瘦せぎすの姿はきわめてロマンチックに思えた。僕は本を



閉じ、彼女はソファの傍にあった僕の前の椅子に腰を下した。きつと無意識に音を立ててしまい彼女を起こしたのではないかしらと言うと、すぐさまこう答えた。

「とてもない！ 自然に目がさめたのよ。」

彼女をじっとみつめて、その答えを僕は疑った。なぜといて彼女の眼は寝ていた人の眼ではなくて、まるで眠っていないような顔であった。けれどもそう見てとったことはすぐに忘れてしまい、ちょうど僕のために寝つかれなかったのだが、僕を心配させたりあるいは憤慨させないために嘘をついているのではないかということも思い及ばなかった。さきにも述べた通り、彼女は非常に優しい人なのであった。

「でも、そろそろ時間になって来ますね。」

と僕は云った。

「近所の人が寝ていても貴方はねなくて本当に辛抱づよいのね。それに独りっきりで待っているなんて！ 幽霊を怖くないこと？ あたしのことをみたとき、びっくりしたんじゃないかと心配したのよ。」

「足音が聞えたときはおかしいなと思ったけれど。でも奥様はすぐいらしたから。」

「何を読んでの？ ああ分かったわ。『三銃士』でしょ？」

「そうです。面白いんですよ。」

「小説、好き？」

「大好きです。」

『モレニーニヤ』も読んで？」

「ああ、マセドウ氏の？ マンガラチーバに置いてあるよ。」

「私は小説が大好きなだけけど時間がなくて。どんな小説を読んでの？」

僕は幾つかの小説の名をあげ、コンセイサウンはソファに頭をもたせて、眼は半分閉じたまま僕をみつめて聞いていた。ときどき唇をぬらすためになめていた。僕が話終わったときには彼女は何も言わず、そのまましばらく経った。次に頭の位置を直し、指を組み、その上に顎を休め、椅子に肘をもたせて、大きな眼を開けたままじっと僕をみつめていた。これは退屈しているのかなと思ったので、大きな声で云い出した。

「コンセイサウンさん、もうそろそろ時間ですから僕……」

「いやいや、まだ早くてよ。さっき時計をみたばかりなんだけれど十一時半よ。まだ時間はあるわ。でもあなた、こんなに夜も寝ないで昼間ねなかったら大丈夫かしら？」

「こんなこと前もやったよ。」

「私はだめよ。一晚ねないとそのあくる日ったらもう我慢

出来ないし、三十分でも眠らなきゃならないのよ。やっぱり段々としになるのねえ。」

「としですって。とんでもないですよ。コンセイサウン夫人。」

僕の返事があまりきっぱりしていたので、彼女は笑い出した。普段なら彼女の身振りはゆっくりと安定しているのだが、いまは突然立ち上がって部屋の反対側へ歩き出し、窓と夫の書斎の入口の間をしばらく歩き廻っていた。彼女の容姿はおかしくはなかったけれど、服はちよつとだらしなかったし、奇妙な感じを与えていた。たしかに、痩せぎすの女なのだが、歩きぶりはいささか不安定で、からだを苦しそうに動かしているかのような感じであった。このような感じは、あの晩には最もはつきりしていた。ときおり足を止め、カーテンを調べたり棚のものの位置を直したり、とうとう僕の前で足をとめた。僕と彼女との間にはテーブルがあった。コンセイサウンの話はあまり変化がなく寝ないで待っている話をくりかえし、待っていることに対する彼女のおどろきという話に戻ったりして、僕の方では彼女の既に知っていること、つまり宮廷のクリスマス・イヴのミサには列席したことがないのでぜひとも出掛けたいことを何度も述べていた。

「おんなじ田舎のミサよ。ミサってどれもこれも似てるん

ですもの。」

「それは分かっていますとも。でももっと豪華で沢山人が集まるでしょう。僕は宮廷の聖週間には田舎のよりずっときれいだと思うなあ。聖ヨハネ祭や聖アントニオ祭のときはそうでもないけれど……」

少しづつ彼女のからだに寄りかかって来た。そしてテールの大理石の上に肘をついて、手で顔を支えていた。ポタンがよくとまっていけないので寝衣の袖は自然とまくれて、腕が半分以上みえた。ほの白く、想像していたよりも痩せてはいなかった。その姿は、僕には珍らしいというほどでもなかったけれど、かといって当たり前でもなかった。だが、あのとき、僕の受けた印象は非常に強かったのだ。彼女の血管ときたら、あまりにも青いので、僕の席からはそんなに暗くても数えられるくらいだった。つまり、コンセイサウンの姿は読んでいた小説よりも刺激的だった。僕は田舎の祭と都会の祭について話したり、あるいは口へのぼってくるいろいろのことについて意見を述べたりしていた。それほどのもないのに話題を次から次へ変えていったり、又、先刻の話に戻ったり、彼女を笑わせるために、真白でよくそろったあの歯を見せて貰うために自分でも笑い出すのだった。彼女の瞳は真黒ではなかったけれど、たしかに黒みがかっていた。鼻は長めで殆ど真直

で、ちょっと反っていたが、そのために顔が神秘的にみえた。僕が声をちょっと高くすると、彼女は制した。

「もっと静かにね。お母さんが起きてくるわ。」

そして彼女は、僕たちの顔が寄りそう快いあの位置から離れた。確かに、聞こえるために大声を出す必要はなかった。囁くようにして喋り、僕の方が彼女より口数が多かったのは事実だ。彼女は時として大変深刻な顔を、顔にしわが見えるくらいだった。とうとう彼女は疲れてしまつて、顔かたちも変わったが場所も代えた。テーブルを廻つて歩き、僕の傍のソファに腰を下した。その方を見たらチラッとスリッパの先が覗いていた。だが、それは彼女が腰かけようとしたときだけで、寝衣は非常に長く、それをすぐ覆つた。たしかあのスリッパは黒だったと思う。しかしコンセイサウンは再び小声で言い始めた。

「お母さんつたら遠くにいろけれど目ざといのよ。そうして今、眼が覚めたら、仲々寝つかれないの。」

「僕もそうだよ。」

「なあに、何でもすつて。」

彼女はもっとよく聞えるように寄りかかってきた。そしてソファの傍にある椅子に坐つてもう一度同じことを繰り返した。彼女は偶然に笑つた。仲々寝つかれないのは僕たち三人とも同じなのだった。

「私もお母さんと同じことがあるのよ。眼が覚めてしまふと仲々寝つかれないの。ベットで転々としてね、立ち上つて蠟燭に火をともし、散歩したりして、もう一度ベットに入つてもだめなのよ。」

「今日もそんな風だったんでしょ。」

「いいえ、とんでもない。」と彼女は答えた。

彼女の答えは判然としなかった。恐らく、彼女自身にも分からなかったのだらう。彼女はベルトの端を手にして膝の上、右の膝の上を叩いた。というのは足を組んでいたからである。それから又、夢の話に戻り、子供の頃、たった一日だけ悪い夢を見たといった。僕も悪い夢をみるのかどうか知れたが、話はこうしてゆっくりと長びき、僕も時間のことやミサのことは全く忘れてしまった。ある話やある説明が終わると、彼女は又もや質問したり話題をかえたりするので、僕は又説明するのだった。彼女は時々注意した。

「もっと静かに、静かによ……」

時おり、休止もあつた。二回ほど、彼女が眠つたのじゃないかと思つたが、その眼はしばらく閉じたあとすぐに開き、眠気もないようで、又疲れも見せず、まるでよくみつめるために閉じたかのようにだった。そういうときに僕がじつとみつめることが分かつたらしく、突然か、ある

いはゆるやかにか覚えていないけれども、確かに眼を再び閉じるのだった。この夜の印象は漠然とし、混乱しているかも知れない。あの夜のことになると、僕の考えは混乱したり矛盾したりするのである。だが確かまだハッキリしている想い出は、あるときはせいぜい感じのよい女だったのが、急に美しくなり、絶世の美人に見えてきたことである。彼女は立ち上がった手を組み合わせたので敬意を表わすつもりで立とうとしたが、彼女は僕をとどめ、肩に触れ、もう一度腰かけるようにと押した。何か云いそうに思えたが、まるで寒気でもしているかのようにからだが震え、背を向けて僕が読書をしていた椅子に腰を下した。そこからソファの上にある姿見に目を向け、掛けてある二つの絵画について云い始めた。

「この絵だんだん古くなったわ。シキニョに新しい絵を買うように頼んであるんだけれど。」

シキニョは夫の名だ。そして絵は彼の最大関心事であった。ひとつは『クレオパトラ』の絵で、もうひとつはよく覚えていないがたしか女の絵だった。両方とも平凡だったけれどあの頃はそれほど拙い絵とも思わなかった。

「きれいだよ。」

僕は云った。

「たしかにきれいだけれど汚れているのよ。ほんとのこと

いうと、聖人の絵の方が良かったわ。あれは若い人とか床屋さん向きなのよ。」

「床屋さん！　でも奥様は床屋へいらしたことはないでしょう。」

「でも、お客が待っているときは、若い娘とか恋愛について喋っているでしょうし、親方も勿論きれいな絵でお客を喜ばせようとするわ。こういう絵は、ちゃんとした人の家には向かないわ。これは私の考えなの、たしかに私にとってちょっと変わったことをよく考えるわねえ。まあいづれにしてもあの絵は嫌いよ。私、聖母マリアのほんとうにきれいなものを持ってますわ。しかし彫像だから壁にかけられないし、私もそんなことは考えてないの。私のお聖堂みどらにおいてあるのよ。」

お聖堂の話が出たのでミサのことを思い出し、もう遅いなと思ったし、口を開こうと考えたが、彼女が優しく面白くあまりゆっくりと喋るので、僕の気持はのびのびするようになり、ミサや教会のことを忘れてしまう位であった。

いろいろ話題をまぜながら、殆どとどまることなくしに少女時代や若い娘の頃の信心深い気持の話をしたり、舞踏会の話、遠足の話、パケタの思い出、それからすぎこし日のことを思い、現在の家のこと、世帯の苦勞などに及び、こういうことは結婚する前に大変だと云われたけれども別段大

したことはないと思つていたという。彼女は言わなかったけれど、二十七歳で結婚したことを僕は知っていた。

いまや先刻のように場所を変えたりなどせず、彼女は殆ど同じ姿勢でいた。もう大きな眼をあけてはいなかったが、何となく壁をみたりしていた。

「この部屋の壁紙をかえなくちゃ。」

しばらくするとこう云い出し、何か呟いているようだった。

僕はあと話すこともなく、あの催眠状態、口の利けないあの状態から抜け出そうとして、合点槌を打ったりしていたが、この会話を打ち切ろうか止めまいかという気持ちで、彼女から目をそらそうとした。敬意を表わそうとして目を避けたのである。が、退屈していいところを見せようとして、またもやコンセイサウンの方へ眼を向けてしまった。会話はまた途切れてしまった。外は全く静かだった。

どの位たったか分からないが、暫くの間、全然無言でいた。たった一回聞えた音というのは、書斎にいるねずみの立てた音だけで、その音が僕をあゝの催眠状態から引き戻してくれた。そこでねずみの話でもしようかと思いついたが、どう言い出したものか分からなくなった。コンセイサウンはもの想いに耽っているかのようであった。突然、窓の外側からノックの音が聞えた。

「ミサだよ！ ミサだよ！」

「お友だちだわ。」

彼女は立ち上がったて云い出した。

「おかしいわね。あなたが彼を起こすことになっていたのに、彼があなたを起こしに来たのねえ。いつてらっしゃい、もう時間なのね。さよなら。」

「あ、もう時間？」

僕は尋ねた。

「もちろんよ。」

「ミサだよ！」

と外から叩きながら繰り返した。

「行つて、行つて。待たせると悪いわ。私がいけなかったのよ。私のせいだわ。さよなら、又あしたね。」

そしてあの不安定なからだのコンセイサウンはずかに歩きながら廊下へ出ていった。僕は外へ出て行き、待ちかねていた友達と会った。そして教会へ出かけたが、ミサの間、一度ならず僕と神父との間にコンセイサウンの姿がちらついた。思うにあれは僕が十七歳だったせいだろう。

翌朝、食事のとき、クリスマス・イヴのミサのこととか教会に来た人々のことが話題にのぼったが、コンセイサウンはさほど興味を示さなかった。その日も、いつものように自然でやさしく、前夜の話を想い出させるようなことは

全くなかった。正月になって、マンガラチーバへ帰省した。そして、三月にリオ・デ・ジャネイロに出てくると、書記が脳溢血で亡くなったと聴かされた。コンセイサウンはエンジェニオ・ノーボに住んでいた。けれど僕は訪問しなかったし、彼女に出逢うこともなかった。しばらくすると彼女は亡夫の部下だった人と結婚したと聞いた。

つけ鼻の美人

ジョアウン・ド・リオ

一八八一年リオ・デ・ジャネイロ生まれ。短篇作家として有名で、オスカー・ワイルドの影響を受け色彩豊かな都会的作品を書いた。とくに *Dentro da Noite* 「夜のなかで」という短篇集はブラジル文学界に大きな影響を与えた。一九二一年リオ・デ・ジャネイロで歿。

ああ！ 仮装の話か！ 自分の生活の中でそういう経験をしたことがない奴っているだろうか？ カーニバルは、思いもかけない苦しい経験を与えてくれてこそはじめて面白くなる……というものののだ。それが快いか気味がわるいか、寒気がするか残酷なセックスかを問わず、ともかく誰しもカーニバルの逸話を持っている。冒険のないカーニバルなんてカーニバルではない。今年も僕はこんな冒険をしたんだ……。

エイトール・デ・アレンカルは、周りにいる仲間的好奇心を愉しみながら、椅子の上にだらりと足を伸ばし

た。

その部屋には、ベルフォルト男爵、御婦人方には全くお気に召さないアナトリオ・デ・アザンブージャ、風変わりなブレイガール、マリア・デ・フロールなどがいて誰もエイトールの冒険を知りたくてむずむずしていた。室内はしんと静まりかえっていた。エイトールは外国煙草をとり出し、何かもの想いに耽っているようだった。

「うれしい冒険かしら？」とマリアはたずねた。

「その人の気持によるさ。」

「汚いことなの？」

「すくなくとも怖いことだよ。」

「昼間のこと？」

「いや、夜明けだった。」

「じゃあ、早く始めるよ！ マリアはもうしびれを切らしちゃってるぞ。」

とアナトリオが催促した。

エイトールは煙草の煙を吸い込み、話しはじめた。

——カーニバルの時には墮落、肉体的な快楽、何かとてつもない遊びなどを期待しない奴っていないだろう。殆ど病理的な欲望が抑えられながらもその雰囲気にはしみ込んでゆくような感じだ。セックスが息づき、あせり、狂気沙汰などが溢れ、その偏執狂的な四日間、飛び跳ね、キイキ